

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区			
前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	主体的に学び合う力
・至誠中学校区3校で義務教育終了段階の子供の姿を共有し、教育活動の充実を図る。 ・一人一人の個性を尊重し、多様性社会の担い手の育成に向けた取組を推進する。	・確かな学力の定着や学習習慣の確立及び基礎体力に課題がある。 ・積極的に挨拶をすることができ規範意識が高いが、自己肯定感が低い児童・生徒もいる。 ・自分で考えて行動することが苦手である。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	主体的に課題を発見し、自分で考え、協働して解決することができる子ども
		中学校区として統一した取組等	○授業づくり 単元で『身につけるスキル』を明確にした授業を通して、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。

III 自 校

ミッション

確かな学力・豊かな心・健やかな体をもつ児童を育成し、
保護者・地域に信頼される学校

学校教育目標

自分が好き 友達が好き 学校が好き

現 状

○校内児童アンケート 肯定評価
・授業を通してどんな力が付くか理解している 96%
・周りの人の役に立ちたいと思っている 97%
・自分は役に立っていると思う 92%
児童の自己肯定感を高めるために、学校行事と児童会活動を関連させて、
振り返りの際に、児童の頑張りや成長を認め合う時間を各学年とった。
○令和5年度全国学力・学習状況調査（全国）
国語科…58%（67.2%） 算数科…57%（62.5%）
○教職員アンケート
・模擬授業や板書交流を通して子ども主体の学びに向けての授業づくりをし
ている 100%
模擬授業の前に各自教材研究をし、「自分ならどう発問するか」を協議し
ていく。また、校内や他校の授業参観を行い、子ども主体の授業づくりにつ
いて学ぶ機会を設ける必要がある。

育成する力
(21世紀型“スキル&倫理観”)

めざす
子ども像

1・2年

3・4年

5・6年

課題解決力

身近な生活体験から、自
分の課題に気付いている。

課題解決の場面において、
自己の課題に適した改善
策を考えている。

自己課題解決への計画、実
践、評価、改善を繰り返
している。

コミュニケーション力

友達の話をうなずきなが
ら聞き、自分の考えを最
後まで伝えている。

自分の考えと友達の考え
を類似、相違の立場で比
べて聞いている。

友達の考えに質問やアド
バイスをしたり、自分の考
えを相手が納得できるよ
うに伝えたりして、互いに
認め合っている。

粘り強さ

自分でやると決めたこと
やみんなでやると決まっ
たことを最後までやり通
している。

あきらめずに、挑戦して
いる。

自分で目標を立て、主体的
に目標達成にむけて行動
している。

テーマ

研究

めざす授業の姿

内容等

ふるさとと関わり、ふるさとを愛する熊野っ子の育成
～獲得したスキルを活用できる学びを通して～

・国語科・算数科を中心に、【レディネス→スキルを明確にした授業→身に付けたスキルの活用（他教科等・日常生活）】の流れをもった授業づくりを行う。
・教室にスキルの足跡を掲示し、単元で付けられる力やその具体的な活用場面を残して、
児童がスキルの活用を実感できるようにする。

・単元で身に付くスキルを意識しながら学習している。
・単元の予習・復習の必要性や、身に付けた単元のスキルを活用する場面を考え、探
究する学びの質を高めている。

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立熊野小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	力での達成 評価評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期・中期経営 目標の達成状況	力での達成 評価評価	総合 評価	改善方策		
2	主体的に学ぶ 児童の育成	★	継続	国語科・算数科を中心に、くまのステップ【レディネーススキルを明確にした授業→身に付けたスキルの活用(生活科、総合的な学習)】の流れをもった授業づくりを行う。	単元を通して児童が身に付けるスキルを明確にし、「くまのステップ」を児童と共有し、獲得したスキルを活動応じて選択できるように、スキルの足跡を残す。	・児童アンケート「授業を通して身に付けたスキルを他の教科で活用しようとした」80%以上 ・教師は、児童が獲得したスキルを場に合わせて選択できる機会を設けている。	・児童アンケート「授業を通して身に付けたスキルを他の教科で活用しようとした」肯定的評価 88.5%であった。 スキルマークを活用して、身に付けたいスキルを児童と共有している。 ・2 学期からは、獲得したスキルを足跡として残している。	3	3	・単元の始まりや終わりに、スキルの確認や振り返りを行う。 ・単元のスキルの共有を継続しながら、児童が獲得したスキルを選択し、活用できるように足跡を残す。	・児童アンケート「授業を通して身に付けたスキルを他の教科で活用しようとした」肯定的評価 84.4%であった。スキルの共有はできているが、他教科での活用へつなげる点に課題がある。 ・スキルの足跡の掲示することで、単元のスキルを理解している児童は増えている。	3	3	3	・昨年度からの継続もあり、単元のスキルを児童と共有することについては、教師にも児童にも定着しつつあるが、他教科へのつながりには課題があるため、スキルの足跡の掲示方法や、振り返り方法を再考する必要がある。
			新規	児童の興味・関心・意欲を引き出すために、地域の人、もの、ことを巻き込んだダイナミックな単元開発を行う。	教材研究を中心とした研修を設定し、児童や教師の挑戦したいことを組み込んだ単元開発を行う。	・教職員アンケート「研究授業や研修を通して新しい授業づくりに挑戦している」80%以上	・教職員アンケート「研究授業や研修を通して新しい授業づくりに挑戦している」肯定評価 87.5%であった。	2	3	・校内研修で、教材研究について情報共有をしたり、授業研究では見る視点(担当児童、授業者のこだわりポイント)を示したりして、教材への理解を深める。	・教職員アンケート「研究授業や研修を通して新しい授業づくりに挑戦している」は、全教員が肯定評価であった。担当児童や授業者の挑戦ポイントなどを指定し、研究授業を行ったり、教員間で授業づくりの挑戦について共有をしたりしたことが、効果的であったと考える。	3	4	4	・今年度は、教科や単元を指定せず、研究授業を行った。挑戦の選択肢は広がったが、研究の軸となる部分が見えづかった。来年度は、研究の軸を明確に示した上でよりよい単元開発につなげていきたい。
2	自己実現に向けて未来を切り拓く子どもの育成	★	継続	児童が活躍できる場、児童に任せる場を設定し、自己肯定感を高める。	・縦割りの班掃除の取り組みを通して、下級生の見本となる場を設ける。 ・行事ごとにペア学年間で感想の交流を行う。	児童アンケート「自分にはやろうと思ったことをやりきる力がある。」肯定的評価80%以上	・児童アンケート「自分にはやろうと思ったことをやりきる力がある。」肯定的評価89.7%であった。 ・縦割りの班掃除で、上級生が下級生に教えながら掃除ができた。 ・運動会・発表会で他学年への感想カードを書くことで交流することができた。	3	4	・引き続き、縦割りの班掃除や行事での感想の交流を通して、異学年が関わり合いながら自己肯定感を高められるようにしていく。	・児童アンケート「自分にはやろうと思ったことをやりきる力がある。」肯定的評価91%であった。 ・縦割りの班掃除で、上級生が学年に合わせた掃除の割り当てをしたり、気づきを伝えたりすることで、上級生としての自覚が高まった。	3	3	3	・掃除の振り返りを、上級生だけでなく、様々な学年が行うことで、異学年での関わり合いを深める。
			新規	元気な挨拶ができる。無言掃除ができる。	・委員会を中心に、朝のあいさつまわりを行う。 ・縦割りの班掃除で、日々の掃除の振り返りを行う。	・児童アンケート「元気なあいさつをしている」肯定的評価80%以上 ・児童アンケート「無言掃除をしている」肯定的評価80%以上	・児童アンケート「元気なあいさつをしている」肯定的評価91.1%であった。 ・児童アンケート「無言掃除をしている」肯定的評価91.1%であった。 ・縦割りの班の中で、無言掃除を意識しながら取り組むことができた。	3	3	・委員会を中心にあいさつ運動を行い、全校にあいさつを広めていく。 ・縦割りの班掃除において、無言掃除ができているかどうか、児童自身が振り返りを行う。	・児童アンケート「元気なあいさつをしている」肯定的評価89%であった。 ・児童アンケート「無言掃除をしている」肯定的評価97%であった。 ・児童会・体育環境委員会を中心に毎週あいさつ運動を行い、元気なあいさつを広めている。 ・毎日、無言掃除の振り返りを行うことで、意識付けをすることができている。	4	4	4	・あいさつ運動をこれからも継続して行い、全校としてあいさつを広めていく。
2	子ども・保護者・地域に信頼される学校	★	継続	児童の姿を丁寧に 見取りながら対応し、児童が楽しく通える学校づくりを	全教職員で情報を共有し、関係者を中心に、組織的な取組を行う。	・保護者アンケート「わが子は、楽しく学校に通っている」肯定的評価90%以上	・「児童は、楽しく学校に通っている」と捉えている保護者は 97.3%であった。信頼に繋がる教育活動ができていると言える。	3	3	・児童への接し方や授業づくり等について教員同士が共有し、児童がより充実した学校生活を送る考え実践していく。	・「児童は、楽しく学校に通っている」と捉えている保護者は中間評価と同様 97.5%であった。楽しく勉強をしたり、遊んだりしている	4	4	4	・児童のよさやがんばりを認め、保護者が安心して通わせることのできる学校で今後もありたい。

	づくり		する。							普段の児童の様子を見て、保護者をそう感じていると				
		新規	働き方改革を含め、組織の一員として学校経営に参画しているという自覚をもつ。	一人一人が業務を計画的に遂行し、時間管理を行う。学校教育目標につながる計画を提案し、実践する。	- 原則として全員が定時退校。 - 全員が学習効果のある新たな提案・実践をする。	- 全職員が働き方を見直し、定時退校を意識して業務にあたることができるようになってきた。時間外在校時間4.5以内100% - 学年によって差異はあるが、各学年独自の工夫した取組を進めることができるようになってきた。	4	4	- 必要な物と必要でないものを見極め、教育の質の向上を視野に入れた働き方をさらに進めていく。 - 学習効果のある取組とそうでない取組についての交流や、失敗を恐れない挑戦を続ける。	- 基本定時退校の意識がある程度定着し、中間評価と同様、時間外在校時間4.5以内の職員は100%であった。 - 限られた時間内でできることを個々の職員が考え実践するようになるとともに、全担任は、新しい学びに繋がる研究授業を行った。	4	4	4	- 更に放課後の時間を有効的に使い、忙しくなりそうな時期を見越した働き方をしていく。 - 新しい学びにチャレンジしていこうとする意識を継続しながら、教育活動を行っていく。